

ドイツのギムナジウム上級段階における 音楽科教育（２）

—到達目標に示される学力を中心に—

Musikerziehung an der gymnasiale Oberstufe in Deutschland (2):
über die erwarteten Lernergebnisse als verbindliche Anforderungen

伊 藤 真

はじめに

音楽科教育において学力に関する議論は絶えず行われている。そもそも体系的な学問的知識の積み重ねによって構築される他の諸教科と異なり、音楽科は音を素材とし、音を媒介として成立する領域である。したがって、音楽に関する知識や演奏に関する技能、あるいは音楽を愛好する心情や感性などが中心となり、学力というタームがなじみにくい性質がある。しかし、音楽科教育も他の諸教科と同様に学校教育の一部を成している以上は、同じ「学力」という土俵で生徒の学びについて議論し、その方向性を明確にする必要がある。島崎は「学力」というタームの概念を「学んだ成果」と「学ぶ力」の２つに整理した上で、1970年代後半からの音楽科教育における学力に関する研究や動向を概観し、音楽科教育が固有に担わなければならない学力が「表す力」（文化的価値の再創造、および文化的価値の創造と発見）と「聴く力」（文化的価値の理解と賞賛）の２点であることを主張している¹⁾。吉富・三村らは、音楽科学習指導要領に定められている内容が音楽科の学力として体制化されていないのではないかという問題意識から、音楽の授業で定着した学力の実態を調査し、効果的な音楽科カリキュラム開発をめざした研究を継続的に行っている^{2) 3)}。小学校音楽科における学力の調査では、聴唱・視唱の能力と音符・休符・記号と和音記号の理解に関して音楽科学習指導要領に示された水準を達成していないことが明らかとなり、これら不達成事項を中学校音楽科において学力として保障するカリキュラムの構築の必要性を説いている。

このように、音楽科教育をめぐる学力論争は一般的な知識・理解などの水準を超えて、近年コンピテンシーという言葉で表現されるような生活の中で有用に働く高次の知識・技能の獲得をめざすものから、差し迫って学習指導要領で示された学習内容の定着を保障することをめざすものまで、様々な内容を含む議論へと展開している。その中で、我が国と同様に学力に問題意識を見出し、近年新たな教育改革を行っているドイツに注目したい。ドイツは資格社会といわれるように、各教育段階修了時に修了資格を取得することによって次の教育段階へと進むシステムを採っている。いわゆる音楽の授業は我が国と同様に高等学校（ドイ

ツではギムナジウム上級段階）で行われるのが最終であり、ここで一般大学入学資格を得て大学における専門的学修へと進む。したがって、ドイツのギムナジウム上級段階における音楽科教育がどのような学力の獲得をめざしているのかを明らかにすることによって、我が国の音楽科教育の学力を議論する上で重要な示唆を得ることができると思われる。本稿の目的は、ドイツのギムナジウム上級段階を対象として、音楽科学習指導要領に記述された到達目標をもとに、獲得が期待される学力について検討を行うことである。

本稿でとり上げるギムナジウム上級段階の音楽科学習指導要領は、ハンブルク州（2004年）⁴⁾、および、ベルリン州、ブランデンブルク州、メクレンブルク・フォアポンメルン州の3州が共同で発表したもの（2006年）⁵⁾の2点である。前者ハンブルク州の2004年版は到達目標が比較的明確に示されており、ドイツの音楽科教育における学力の方向性を示すものと思われる。後者は3州が共同で作成したものであるという点において、今後のドイツの音楽科教育の新たなモデルを示す事例となるものである。というのは、歴史的にドイツには各州に文化高権があり、教育の権限は連邦がもつのではなく各州に委ねられているため、学校教育を形成する基盤となる学習指導要領は各州の当該省庁によって作成されてきた。しかし、近年の教育の動向を概観すると、教育の質の向上、および教育の外部評価の観点から各州共通の教育スタンダードを作成し⁶⁾、どの州においても一定レベルの教育水準を保とうとする動きがみられる。KMK（常設文部大臣会議）が国家的な共通スタンダードを決議した際（2003～2004年）には、主要科目である言語系、理数系にのみ焦点が当てられていたが⁷⁾、他の教科にとっても先の理由からスタンダードの枠組みの必要性が高まっていることがうかがえる⁸⁾。

1. ギムナジウム上級段階の音楽⁹⁾

ギムナジウム上級段階に大きく掲げられている目標は、前期中等教育段階において獲得した美的専門知識・能力をさらに発展させることである。音楽の授業は美的教育の一部である。したがって、その課題として、生徒が感覚的な、とりわけ音楽的な経験に関して様々なことを習得できるようにすること、また、様々なものの見方、音楽や音楽活動を形成する可能性を開くことが挙げられる。音楽の授業では美的行動や美的思考によって音楽と接することによって、生徒を学問的世界へと導くものである。

音楽の授業の課題は、相互に関連する3つのレベルにおいて、音楽に関する美的専門知識・能力を支援することである。すなわち、①創造的な観点における能力・技能（想像力・表現力、および音楽を創作したり演奏したりする能力）、②音楽の受容に関する主観の能力（知覚能力および経験能力）、③考察する能力と意見を交換する能力（音楽に関して思考し、音楽を解釈し、音楽について意思疎通を図る能力）である¹⁰⁾。

また、音楽の授業には生徒の音楽的能力を支援するという課題も含まれている。すなわち、今もっている音楽的行動に関する専門知識・能力を拡大し、音楽実践の新たな可能性を開く

ことである。音楽実践には音楽を扱うすべての形態が含まれる。とりわけ、演奏、創作、即興、聴取、記述、解釈、音楽の評価、ダンス、コンサート、などが挙げられる。

音楽が生活の形成に役立ち、自己表現の手段として用いられるのか、また、音楽がコミュニケーションや相互作用の可能性として用いられるのか、あるいは自己の世界を広げられるのか、といった点で音楽実践は異なる。音楽の授業はこの相違に関して責任を負っている。この中で生徒に求められることは次の3点である。すなわち、①音楽のある生活を形成し、音楽的手段で表現すること（個々の形成）、②他人と一緒に音楽生活に参加し、適切な方法で身の周りの音楽に関わること（文化的関与）、③記号で事象を伝える形態としての音楽を理解し、音楽の意味内容を考察すること（音楽理解）、である。

音楽の授業は学習段階に応じて生徒の職業オリエンテーションにも寄与する。それゆえ、音楽に関わる職業が芸術学的、教育学的、音楽産業的、商業的、組織的に方向づけられ適切にテーマ化される。その際には、職業教育の場、職業教育の形態と学習課程、課題と機能、および採用の展望と労働の可能性に焦点が当てられる。

ギムナジウム上級段階はセメスターごとのコース制を導入しており、コースは基礎コース（Grundkurse）と発展コース（Leistungskurse）の2つに大きく分けられる。学習を専門的に深める発展コースでは、生徒は音楽に重点を置いて学習することが可能である。この発展コースは基礎コースに対して、課題の複雑さ、情報の量、処理のきめ細かさ、学習の独立の点で要求される内容が多様多様となっている。これは特に音楽史、音楽理論、記譜法の扱い、および識別的な聴取能力に関係している。高度な演奏能力や歌唱能力は前提条件ではないが、発展コースを受講し、よい成績を得るためには、それらの能力を保持していることが有利かつ必要な条件であることは間違いない。それに対して、基礎コースでは生徒の音楽的基礎教育が保障されており、筆記・口述試験科目として、あるいは選択必修科目として音楽が配置されている。

2. 到達目標をめぐる問題

ドイツの場合、近年の例外を除いて基本的には16州が独自の学習指導要領を作成しているため、設定される到達目標もその内容構成に応じて多様に表現されることとなる。学習指導要領の内容構成には、例えば、ヴェーヌス（Venus, D.）が示した5つの行動様式（創造、再創造、受容、転換、熟考）¹¹⁾を基礎とした学習領域によって構成されるものや、音楽の構成要素や学習の対象となるテーマなどを基礎として構成されるものなどがある。これらは授業をどのように構成するかという点で大きな指標となるものであるが、決まった枠組みがあるわけではなく、州によってばらつきの度合いが大きい¹²⁾。また、たとえ行動様式を基礎とした学習領域によって構成された学習指導要領であっても、到達目標が各学習領域にそって表現されるとは限らない。同様に、音楽的内容を基礎として構成された学習指導要領であっても、異なる枠組みで到達目標が設定される可能性もある¹³⁾。

ハンブルク州の2004年版は、授業の対象、学習領域、考察のディメンションなどの学習指導要領の構成に即しながら、それらをまとめた形で到達目標（要求）を列記している。示された到達目標の1つひとつは具体的な表現によって記述されているが、それが授業の対象のどの部分に関わっているのか、どの学習領域に関わっているのか、考察のディメンションのどの部分に関わっているのかが分かりづらい。したがって、示された到達目標に従って評価を行う教師の評価に対する力量が問われる。

ベルリン州、ブランデンブルク州、メクレンブルク・フォアポンメルン州（3州共同）は、3つの能力領域（知覚・理解、形成、思考）を柱とし、各領域に即して到達目標（スタンダード）が記述されている。学習指導要領によれば、3つの能力領域、到達目標、およびテーマ領域をそれぞれ考慮しながら授業を構成し発展させることが必要である¹⁴⁾。

いずれにしても、授業を形成する際の教師の自由度が保障されている同時に、どのように授業を形成し評価を絡めていくのかといった教師の力量が問われる。

3. 音楽科学習指導要領における到達目標の検討

2つの音楽科学習指導要領、すなわちハンブルク州（2004年）、およびベルリン州、ブランデンブルク州、メクレンブルク・フォアポンメルン州共同の3州共同版（2006年）に記述されている到達目標を比較検討する。先述したとおり州によって学習指導要領の構成に差異がみられるため、ここでは3州共同版の枠組みである（A）「音楽の知覚・理解」、（B）「音楽の形成」、（C）「音楽の思考」、の3つの領域に整理して比較することにする。なお、ギムナジウム上級段階は1年次を準備段階（Vorstufe）、2～3年次を本段階（Studienstufe, Qualifikationsphase）として区別しているが、本稿ではギムナジウム上級段階修了時の最終的な学力を明らかにする観点から、本段階の記述を対象とする。

2つの音楽科学習指導要領に示されている到達目標を整理したものが表1である。基礎コースと発展コースで重複した内容はまとめて表示している。まず、（A）「音楽の知覚・理解」において、いずれの州にも共通している事項として、音楽の形式や様式を理解し、それに基づいて楽曲を整理・分類し、説明することや、様々な音楽作品や編曲作品、録音等を比較することが含まれている。この領域はハンブルク州の方が記述量が多く、音楽の構造に関して説明する能力や音楽史に関する知識を楽曲に関連させる能力など、到達目標として規定される幅が広い。一方、3州共同版では楽譜から響きをイメージする能力、すなわち読譜力と内的聴感力に関する記述がある。

次に、（B）「音楽の形成」において、共通事項として音楽の転換が含まれている。音楽の転換とは、音楽を言葉や絵画、動きなど音楽以外の表現形態で表現すること、あるいは逆に音楽以外の形態で表現されたものを音楽的に表現し直すことを指す。これは、ドイツの音楽科教育において一般的に広く定着している内容である。ここではギムナジウム上級段階という学年段階にふさわしく、音楽とそれ以外の芸術的要素との関連性について認識したり、解

釈・解説したりするような高い水準が求められている。また、声と楽器の扱いに習熟していることや、創作したり演奏したりする技能、演奏や解釈に対するイメージの理由づけを行うこと（根拠を示すこと）が含まれている。3州共同版では、音程や強弱などに関して自分の演奏をコントロールする技能が求められている。

そして、(C)「音楽の思考」において、共通事項として音楽を歴史的コンテキストや社会的コンテキストなどで分析・解釈し、根拠を挙げながら説明する能力が求められている。また、音楽に関連するテキストの内容を解釈し、評価し、根拠を示しながら論じる能力も求められている。ハンブルク州では、他者の意見を受容し尊重することや、音楽を心理学的側面、美学的側面、歴史的側面から研究することが含まれている。

到達目標を「知覚・理解」、「形成」、および「思考」の3つの領域に整理して概観すると、いずれの領域にも分析したり、説明したり、論じたりする行動様式が含まれていることに気がつく。とりわけ、言語的に論理的に表現することが重視されており、たとえ音楽を聴取したり演奏したりする領域であっても、単に音楽を聴き取る能力や演奏する技能が求められるだけでなく、それらの活動を踏まえた上で、言語によって意思を表明する能力が強く求められているといっていよい。

それぞれの音楽科学習指導要領に示された到達目標の項目の、3つの各領域に占める割合を示したものが図1である。2つの学習指導要領はどちらも到達目標が基礎コースと発展コースに分けて示されており、その項目数の内訳は、ハンブルク州が基礎コース12項目、発展コースが17項目、3州共同版が基礎コース13項目、発展コースが13項目である。図1には基礎コースと発展コースの両項目をまとめてその割合を示した。発展コースの項目の内容は、基礎コースの内容と重複しているものもあるが、すべてカウントし、合計して示している。3州共同版では基礎コースと発展コースに共通する内容として示されている項目もあり、それらはそれぞれのコースにカウントした。

ハンブルク州は、(A)「音楽の知覚・理解」の領域の割合が最も高く、48.3%であった。とりわけ、時代、様式、ジャンル、作曲家などに関する幅広い知識を獲得し、楽曲をその特徴によって識別・分類すること、聴取した音楽を分析し音楽の構造を把握することが強調されている。一方、3州共同版は、(B)「音楽の形成」の領域の割合が最も高く、46.2%であった。ここで特徴的なことは、演奏に関する内容が基礎コースと発展コースにそれぞれ3項目ずつ含まれ、演奏技術の習熟、演奏のコントロール、演奏に対するイメージの明確化と演奏への反映など、演奏のプロセスに関する内容が設定されていることである。

表 1 到達目標の比較

	ハンブルク (2004)	ベルリン ブランデンブルク メクレンブルク・フォアポンメルン (2006)
(A) 音楽の知覚・理解	<ul style="list-style-type: none"> 時代、形式、ジャンル、作曲家の基礎的な概括的知識 音楽の構造の説明、図形的表現 様々な音楽作品、詩につけられた様々な音楽、様々な編曲、様々な演奏を比較 時代、様式、ジャンル、形式による分類 音楽史の展開の説明、現在の音楽と結びつける 時代、形式、ジャンル、作曲家の広い概括的知識、曲例への応用 社会史、宗教史を含めた歴史の知識を曲に関連 	<ul style="list-style-type: none"> 時代、様式による分類、説明 形式、様式、作曲意図から分析 楽譜から響きを予想する 形式の差異の説明 様々な音楽作品、詩につけられた様々な音楽、様々な編曲、様々な録音を比較分析 時代、様式による分類、比較
(B) 音楽の形成	<ul style="list-style-type: none"> 要素に従って音楽的構成を発展 手本を実践的に表現 音楽と言葉、動き、絵画、標題、舞台の場面との関係を認識、解釈 作曲、解説、実演 楽器や声による楽曲の再現、解釈のイメージを発展、実現化 	<ul style="list-style-type: none"> 声乐と器楽の習熟 音程の調整、強弱のバランスやタイミングの修正 演奏のイメージの理由づけ 旋律と伴奏の創作 演奏会、録音を目的とした練習 伝統的なイメージ外で音楽を発展 音楽を絵画、動き、劇、文章などに異化、制作意図の解説
(C) 音楽の思考	<ul style="list-style-type: none"> 根拠をもった音楽の判断、他者の意見の尊重 形式と構造、響きの作用の意味、音楽における立場、受容などを音楽のコンテクストから導き出す (解釈内容の根拠の説明) テキストの中心的な表現内容、評価を論じる、根拠を示す 音楽心理学的研究、音楽美学的研究、音楽史的研究 	<ul style="list-style-type: none"> 分析・解釈結果を歴史的・社会的関連で説明 音楽の社会的・経済的・政治的影響力の可能性に対する問題意識 テキストをまとめ、曲例に基づいて論じ、自分の意見を的確に述べる

* ハンブルク州およびベルリン州・ブランデンブルク州・メクレンブルク・フォアポンメルン州
共同の学習指導要領をもとに筆者作成。

* 斜体部分は発展コースの到達目標を示す。

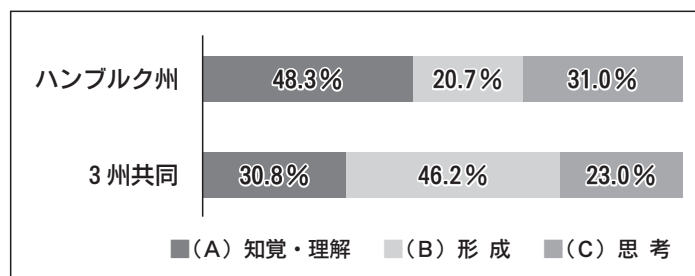


図 1 領域別到達目標の割合

4. 到達目標に示される学力とは

1) 行動を志向した到達目標

授業の目標を設定する際に留意すべき点として、行動目標で示すことが挙げられる。行動目標とは、学習者の行動の変化をできるだけ明確にとらえるために行動の形で目標を示すことである¹⁵⁾。木村は、学習すべき内容が具体的な言葉で記述されることの利点として、「目標と内容の関連が明確になり、特定の授業も具体化されることが可能になり、学習指導過程の工夫を図ったり、学習の成果を適切に見きわめたりすることができるようになる」¹⁶⁾と述べている。ハンブルク州の音楽科学習指導要領では、「音楽の構造や作用を説明することができる」、「記述し説明することができる」、「音楽の構成要素を理解し説明する」、「音楽の部分的構造を明確に説明することができる」などのような記述が多く、生徒の行動が目に見える形で表現されていることが分かる。同様に3州共同版においても、「音楽作品を時代や様式によって分類し、説明する」、「演奏のイメージに理由づけをする」、「分析・解釈の内容を説明する」など、目標の到達度が生徒の行動によって把握・評価されることがわかる。初等教育段階や前期中等教育段階では、動きで表現したり、音楽を聴いて感じた印象や内容を言葉で表現したりといったことが多いが¹⁷⁾、後期中等教育段階では、様々な言語的表現に重点が置かれているため必然的に生徒の行動がより明確に記述されるようになる。このように、到達目標の中に記述されている内容は我が国の学習指導要領と比較して、記述された生徒の行動が多様かつ詳細である。言語的、理論的に表現する能力は記述試験において評価されることから、ハンブルク州および3州共同版の音楽科学習指導要領における到達目標は全体として行動目標を意図して作成されたといつてよい。このことに関連して、到達目標の表現についてさらに詳細にみてみることにする。

2) 言語的表現能力の重視

先述したようにギムナジウム上級段階では、音楽の実技的側面に関する技術や能力が要求されているというよりも、音楽に関わる文献を読み考察を行うこと、音楽の構造を分析すること、自ら論を展開すること、音楽と社会の関連性について考察を行いまた根拠を示しながら論じることなど、理論的側面の能力が要求されていることが大きな特徴である。これまでの学習で得てきた知識などをもとに、他の分野に応用することも求められている。すなわち、音楽を奏でることによって自分の思いや作曲者の意図を表現することも重要なことではあるが、音楽を分析的に解釈し、言語化して説明したり記述したり、あるいは論じたりすることの比重の方が大きいことがみてとれる。

このことを、2つの音楽科学習指導要領に示された到達目標の中でみられる表現を取り出して検証してみたい。

次に示すのは、ハンブルク州で用いられている主要な表現である。

- *begründen* (理由を説明する)
- *begrundet urteilen* (根拠をもって判断する)
- *begrundet zuordnen* (根拠をもって分類する)
- *beziehen* (関連させる)
- *darstellen* (言葉で表現する)
- *erläutern* (解説する)
- *erörtern* (詳細に論じる)
- *in Fachsprache beschreiben* (専門用語で説明する、記述する)
- *interpretieren* (解釈する)
- *untersuchen* (研究する、調査する)
- *verdeutlichen* (明確に示す、説明する)
- *vergleichen* (比較する)

次に示すのは、3州共同版で用いられている主要な表現である。

- *analysieren* (分析する)
- *begründen* (理由を説明する)
- *beschreiben* (説明する)
- *deuten* (解釈する)
- *eigene Stellungnahmen formulieren* (自分の意見を的確に述べる)
- *erörtern* (詳細に論じる)
- *kommentieren* (解説する、論評する)
- *zusammenfassen* (まとめる、要約する)

このような表現によって到達目標が記述されていることは、ギムナジウム上級段階で習得がめざされる一般大学入学資格（アビトゥーア）のための試験内容と大きな関連性が認められる¹⁸⁾。アビトゥーア試験の問題は、設問の大部分が論述形式になっており、受験者の記述・論述能力が高く求められている。また、理論的に思考し、論述する能力を試験するために、上述した到達目標の表現と同様に幅広い解答活動を求めるような表現がちりばめられている。したがって、音楽科教育をとおして、分析と解釈を基盤として専門的テキストを論究する能力や、言語的に表現したり記述したりする能力が適切に獲得できたかどうか問われる。

おわりに

本稿は、ギムナジウム上級段階の音楽について概観した上で、ハンブルク州およびベルリン州、ブランデンブルク州、メクレンブルク・フォアポンメルン州（3州共同）の音楽科学習指導要領における到達目標の記述について検討し、音楽の多様な現象を言語的表現によ

て論理的に説明したり解説したりする内容が中心となっていることを示した。それは学問的準備段階としての後期中等教育段階の位置づけを明確にするものであり、大学における専門教育および研究に必要とされる基礎的能力が何であるかを表明しているものといえる。我々が音楽の授業によって獲得すべき技能としてイメージしがちな、細かな演奏技術や音楽に対する愛好的心情、あるいは音楽的な感性などは、ギムナジウム上級段階のレベルではことさら丁寧に記述されることはない。それは、それらを決して蔑ろにしているということではなく、初等教育段階、前期中等教育段階を経て、最終学年の第13学年（場合によっては第12学年）までにはすでに獲得されて然るべきことであり、それらをふまえた高次の能力形成をねらいとしたカリキュラムを構成していると捉えるべきである¹⁹⁾。

複数の校種（基幹学校、実科学学校、ギムナジウム、総合制学校など）から成る前期中等教育段階の中で、唯一後期中等教育段階に接続しているのがギムナジウムである。ギムナジウムは、上級段階において一般大学入学資格を取得するための教育機関として存在し、大学における専門的・学問的教育を受けることを希望する生徒が集まるところである。したがって、全ての生徒がギムナジウムに進学するわけではなく、図2に示すように4つの校種のみをとり上げてもその全生徒数の約半数しかギムナジウムには在籍しない。このことを考慮すると、ギムナジウム上級段階の音楽科教育における到達目標は、社会的選抜によって限定された一部の生徒を対象として設定されたものとみることもできよう。我が国の音楽科教育への示唆としては、先述したように全ての学習領域に共通した高次の能力形成を行うことが挙げられるが、今後、初等教育段階や前期中等教育段階の音楽科学習指導要領における到達目標を精査し、全ての生徒を対象とした到達目標から音楽科教育における学力をとらえていく必要がある。

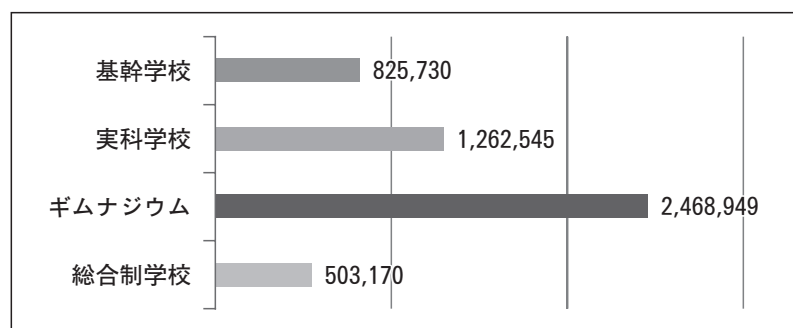


図2 2008/09年度の学校種別生徒数（人）²⁰⁾

註および引用文献

- 1) 島崎篤子「音楽教育における学力」『文教大学教育学部紀要』第41集、2007、pp.31-41。
島崎は「表す力」と「聴く力」の2つの学力を支えるものが「かかわる力」とあり、音や音楽にかかわる力と、他者とかわる力の両者を内包するものであると述べている。また、これら3つの学力が学習成果として「自ら学ぶ力」を強化することを説明している。
- 2) 吉富功修・三村真弓・光田龍太郎・藤井恵子・桑田一也・松前良昌・増井知世子・原寛暁「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（1）—中学校入学時の音楽学力の実態を中心として—」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第36号、2008、pp.155-163。
- 3) 三村真弓・光田龍太郎・桑田一也・松前良昌・高旗健次・藤井恵子「中学校・高等学校音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（2）」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第37号、2009、pp.99-107。
- 4) Freie und Hansestadt Hamburg Beförde für Bildung und Sport: *Bildungsplan Gymnasiale Oberstufe; Rahmenplan Musik*, 2004.
- 5) Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Sport Berlin: *Rahmenlehrplan für die gymnasiale Oberstufe; Musik*, 2006.
- 6) 原田信之「教育スタンダードによるカリキュラム政策の展開—ドイツにおけるPISAショックと教育改革—」『九州情報大学研究論集』第8巻、第1号、2006、pp.51-68。
- 7) 共通スタンダード作成の背景には、OECDによる生徒の学習到達度調査（PISA）における成績不振（PISAショック）がある。PISAで調査される項目が読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーであるため、これらに直接関わる科目のスタンダードが作成されたと思われる。
- 8) 例えば、統合科目「事実教授」では、事実教授学会が専門学会版の教育スタンダードを作成している。原田（2006）前掲論文、p.59、および原田信之「事実教授カリキュラムとコンピテンシーの育成—諸州共同版学習指導要領（2004年）の検討—」『岐阜大学教育学部研究報告書 人文科学』第56巻、第1号、2007。
- 9) ここでは、ハンブルク州の2004年版による記述に基づいて述べる。Freie und Hansestadt Hamburg Beförde für Bildung und Sport, a.a.O., S.5f.
- 10) この3つのレベルの能力・技能はハンブルク州独自のものではなく、一般的なものとしてとらえてよい。ベルリン州、ブランデンブルク州、メクレンブルク・フォアポンメルン州においても、「音楽を形成する（能力）」、「音楽を知覚・理解する（能力）」、「音楽について思考する（能力）」が示されている。Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Sport Berlin, a.a.O., S.9-11.
- 11) Venus, D.: *Unterweisung im Musikhören*. 2.Aufl. Wilhelmshaven: Noetzel, 1984 (1969).

- 12) この点については次の論文を参照のこと。伊藤真「ドイツ前期中等教育段階における音楽科カリキュラム研究—ノルテの類型化を通じた学習領域の解明—」『広島大学大学院教育学研究紀要』第2部、第55号、2006、pp.441-450。
- 13) 本稿では扱わないが、ブレーメン州の場合、7つの必修テーマ領域があり（「時代の変遷における音楽」、「社会的コンテクストにおける音楽」、「他の芸術と結びつく音楽」、「20～21世紀の音楽」、「音楽の幅広い基礎」、「分析と解釈」、「音楽実践」）、各テーマ領域に従って到達目標（スタンダード）が分類・記述されているので、具体的にイメージしやすい。Die Senatorin für Bildung und Wissenschaft, Freie Hansestadt Bremen: *Bildungsplan für die Gymnasiale Oberstufe—Qualifikationsphase—, Musik*, 2009, S.9f.
- 14) Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Sport Berlin, a.a.O., S.15.
- 15) 吉富功修・石井信生・野波健彦・木村次宏・竹井成美・藤川恵子・緒方満『音楽教師のための行動分析』北大路書房、1999、p.48。
- 16) 吉富ほか、前掲書、p.49。
- 17) 伊藤真「ドイツにおける音楽科教育に関する一考察—ハンブルク州基礎学校の音楽科教育プランを中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第49巻、2003、pp.225-260。
- 18) 伊藤真「ドイツのギムナジウム上級段階における音楽科教育—アビトゥーア試験の音楽理論的内容の検討—」『就実論叢』第37号、其の二（社会篇）、2008、pp.29-43。
- 19) ここで述べる高次の能力形成については、ドイツ国内において以前よりも増して高い要求が行われているわけではない。ベルリン州の音楽科学習指導要領改訂（2006年）に関わったクレマー氏（Krämer, O.）によると、このたびの改訂で「スタンダード」という新たな形式によって到達目標を示すことになったが、この改訂ではスタンダードは低めに設定されている。改訂前の学習指導要領でこれまで教授してきた教師が、改訂後の新たな内容に大きなギャップを感じないように、混乱を回避し、指導のしやすさを考慮した。（日本学校音楽教育実践学会第14回全国大会（2009年8月23日）におけるクレマー氏の講演による）
- 20) 連邦統計局のデータをもとに筆者作成。
<http://www.destatis.de/jetspeed/portal/cms/Sites/destatis/Internet/DE/Content/Statistiken/BildungForschungKultur/Schulen/Tabellen/Content75/AllgemeinbildendeSchulenSchulartenSchueler,templateId=renderPrint.psml>（2009年11月17日取得）